

弓削皇子私論

——紀皇女を思ふ御歌四首を中心に——

はじめに

万葉集卷二の相聞部には、連鎖された歌で一つのまとまりを見せる歌群がある。磐姫皇后の歌四首（八五〇～八八〇）、久米禪師が石川郎女に婚を求めた時の歌五首（九六〇～一〇〇〇）、三方沙弥が園臣生羽の娘を求めた時の歌三首（一二三〇～一二五〇）などであるが、伝承歌でないある特定の個人が詠作して、一つのまとまりを見せる連作は、弓削皇子が紀皇女を思つて作歌した四首（一一九〇～一二二〇）だけである。連作されているという点からも、弓削皇子四首は特殊なものと言へる。

そこで、これから考察することは、主に弓削皇子歌の四首に見られる特質である。そして、特質を探り、皇子について卓見を述べたい。

さて、卷二に収められた弓削皇子の連作四首は、次の如く記されている。

森

斌

弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首

吉野川行く瀬を早みしましくも淀むことなくありこせぬ  
かも (一一九)

我妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあ  
らましを (一二〇)

夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな  
(一二一)

大舟の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の児ゆ  
ゑに (一二二)

一、弓削皇子と紀皇女

弓削皇子は、天武天皇の第六子である。天武紀二年の条に、天智天皇の皇女大江の腹に長皇子とともに生れたとある。同腹の兄が長皇子であった。又、持統紀七年の条に淨広武の授けられたことが記されている。没年は統紀・文武三年の記事に記さ

れている。この時も皇子は淨広武の位であった。

没年は知られるが、誕生が記されていない。そこで、淨広武のままであったことと初叙位が二一歳で授けられることを参考にすると、天武二年（六七三）に誕生ということになる。但し、律令の制度そのままに叙位が行なわれるとは思われないので、享年は三十歳程と考えたい。

さて、懷風藻には興味深い記事がある。葛野王伝によれば、輕皇子の皇嗣問題では弓削皇子の発言が載せられている。

斌)

(森

高市皇子薨りて後に、皇太后王公卿士を禁中に引きて、日嗣を立てむことを謀らす。時に群臣各私好を挾みて、衆議紛紜なり。王子（葛野）進みて奏して曰はく、「（略）然すがに人事を以ちて推さば、聖嗣自然に定まれり。此の外に誰か敢へて間然せむや」といふ。弓削皇子座に在り、言ふこと有らまく欲りす。王子叱び、乃ち止みぬ。皇太后其の一言の国を定めしことを嘉みしたまふ。特閲して正四位を授け、式部卿に拜したまふ。

皇嗣を選考する会議で、大友皇子の子である葛野王に反対しようとしたために、弓削皇子は王から「叱び」を受け、「止みぬ」という状態になるのであろう。皇子が何を発言しようと試みたのであろう。尾山篤二郎氏は、葛野王の立太子を主張され

ている。<sup>1)</sup>さらに、川上富吉氏は、持統朝に於ける大友皇子の遺子として不安定な立場を弓削皇子が察して発言をしかけながら、王のために思いとどまったという心情の理解を示されている。<sup>2)</sup>

とにかくこの紛糾した会議では、ときに十五歳の輕皇子が日嗣に決まり、翌年に文武天皇として即位することになる。弓削皇子はいずれにしても会議後三年程の生涯で終わることになる。

では、万葉集で皇子について知られることはどの様なことであらうか。万葉集に収められた詠歌は八首である。その他として、人麿歌集に皇子へ献った歌が五首（九・一七〇一―一七〇三、一七〇九、一七七三）、弓削皇子の薨じた時、置始東人が作った歌（二・二〇四、二〇五）が二首ある。それらも皇子を知る手懸りになる。そして、弓削皇子は、病弱な身と不遇な境遇に鬱積した心労で、持統帝の御世を過したことが知られるのである。

一方、紀皇女はどうであらうか。天武紀二年の条には、天武天皇と蘇我赤兄の女との間に紀皇女が生れたとある。穂積皇子は同母の兄ということになる。生没年が未詳なのであるが、經紀に皇女の没年が記されていないところから、持統十年以前に没していた可能性が強いと思われる。

紀皇女歌は万葉集に一首収められ、しかも巻三の譬喩歌群の

冒頭に掲げられている。又、山前王の哀傷歌（三・四二四、四二五）に添えられた左注には、紀皇女の薨後、山前王が石田王に代つて作歌したとある。この左注から、紀皇女の夫が石田王で、夫が妻の挽歌を山前王に代作させたことを知る。

ちなみに、伊藤博博士は、この四二五番の左注と紀皇女を思ふ歌とから、「弓削皇子・紀皇女・石田王とのあいだには一種の三角関係が存した」と考えられている。さらに巻十二・三〇九八番の左注にある、

右の一首は平群文屋朝臣伝へ云ふ。昔聞くならく、紀皇女竊かに高安王に嫁ぎて嘖はえたりし時に、この歌を作らずといふ。ただし、高安王は左降し、伊予国守に任ぜらる。

などを加味すれば、紀皇女は恋愛で浮名を流し得る女性であつたと思われる。

但し、引用した左注が事実を伝えるとは思われないのは、高安王の誕生が持統期の後半と推定されるからである。しかし、かかる伝承が生まれる素地は、紀皇女になければならない。それは、「竊」なる言葉が使用されていて、しかもそれが天武天皇の皇子女に關わるからである。「竊」とは、兄弟の和を重じた持統朝に於いて、その和に破綻を來たす出来事に使用されている。但馬皇女歌（二・二一六）の題詞に使用されているのは、

その実例の一つである。従つて、「竊」に高安王に嫁いだという伝承は、紀皇女が恋愛の世界で著名な人物であつたし、皇女の本質も伝えていると考えてよい。

さて、弓削皇子が紀皇女に贈つた四首はいつ頃の成立であろうか。紀皇女と弓削皇子の伝から帰納して、恐らく持統年間の後半と思われる。しかも、その時には紀皇女に夫がいたのであろう。弓削皇子歌には、片思いにも似た苦闘に満ちている。

ところで、川上富吉氏は、持統十一年の吉野御幸の時に額田王と弓削皇子の贈答歌（一一一、一一二）が作られ、その年に紀皇女との恋愛もあつただろうと推定されている。弓削皇子歌四首の成立にとって興味深いのであるが、現在の研究では具体的な年月について未詳とすべきであらう。

## 二、類型と個性

弓削皇子の詠歌が八首であつた。皇族の歌人としては、作歌数が比較的に多い。但し、吉井巖氏も既に述べられているが、作歌する契機で分類するときは二区分して処理出来る。一つは吉野の地に関わる作三首（二・一一一、三・二四八、八・一四六七）というグループ、もう一つが紀皇女への相聞として詠んだ作五首（二・一一九、二・一二二、八・一六〇八）というグループである。

以上の作品で弓削皇子の有名な歌といえ、吉野に行幸供奉

したとき、皇子が額田王に贈った、

古に恋ふる鳥かもゆづる葉の三井の上より鳴きわたりゆ  
く (一一一)

ということになる。

初句の「古」とは、諸注釈書で既に述べられている如く、天武天皇に結びつけて考えなければならない。しかし、天武天皇の如何なる時を指すかといえは、そこには疑問として残る点もある。但し、「恋ふる鳥」が霍公鳥を指し、加えて蜀魂の故事を踏まえていることは疑えない。やはり、春宮を辞して吉野に赴いた落潮のときになるのであろう。

ところで、万葉集には霍公鳥が鳥類の中で最も多く詠まれた。集中一五〇首余であるが、蜀魂の故事を踏まえた歌は、弓削皇子と額田王の贈答二首(一一一、一一二)だけである。後に家持は約六〇首ほどの霍公鳥歌を詠んでいるが、霍公鳥に対する風流を歌うに過ぎない。つまり、弓削皇子の霍公鳥歌は、他の歌に見られない故事を含む点に、皇子の教養が認められる。さらに皇子の意図を額田王が「古に恋ふらむ鳥は霍公鳥」(一一二)と答えることを予想して詠んでいることは、王に共感を求めると共に、教養を自慢しようとした術もあろうが、作歌する意欲に満ちている。即ち、皇子の贈歌した相手が額田王であ

ったのは、春秋争いの優劣を和歌で答えた和漢の教養に満ちた女性であり、故事を踏まえることも当然の試みである。しかも、皇子と王とが醸し出した雰囲気は、まさしく蜀の望帝の故事にほど遠いものであっても、類型を見出し得ない独自のものである。その雰囲気について、中西進博士は「清少納言のようになる日は程遠いとしても、宮廷における軽いユーモア」の発生に触れている。<sup>?)</sup>

額田王と贈答を交わした皇子は、恐らく歌を作った契機を同じくすると思われる内容のものを二首残していた。それらは、左記の歌である。

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわが思はなく  
に (二四二)

霍公鳥無かる国にも行きてしかその鳴く声を聞けば苦し  
も (二四六七)

引用した二四二番の歌を考察するとき、是非参考にしたいの  
は、二四四番の歌である。

み吉野の御船の山に立つ雲の常にあらむとわが思はなく  
に

「み吉野の」の歌は、題詞に「或る本の歌」とあり、左注に

「人麿の歌集に出でたり」と記されている。人麿歌集には他人の歌も含む。そこで、二四四番が人麿の作だということも躊躇される。しかし、二四二番と二四四番との違いが初句「滝の上」・「み吉野」、第三句「居る」・「立つ」のみであり、全く別人の作と見做すことは不可能な程類似している。中西博士は、二四二番の実作者が人麿で形式作者が弓削皇子であろう、と想定されている。かかる根拠としては、語句の部分的な相違が伝誦ルートによるものであろうとする。但し、伝誦を問題にするのであれば、伝誦された歌を踏まえて弓削皇子が一首ものしたとも考えられる。とにかく作者について疑問は残る歌である。

伝誦が問題になる様に、類型的な内容も持つ。即ち、「山に居る（立つ）雲」に永久的なものを感じるのは、万葉集に同様な歌が多いことによる。二四三番、五八四番などがその例歌である。ところが、個性も感じられる。それは、景物に託した心情が病弱で命の短かった皇子に似つかわしいからである。

さて、一四六七番の歌は、類型という点でどうであろうか。類歌としては、一四八四番・三七八一番・三七八四番・三七八五番などの歌が採り上げられる。但し、類歌と呼ばれるのであるから共通した内容には、霍公鳥の鳴く声が「聞けば苦しも」（一四八四）、「恋まさる」（三七八一）など悲しみを誘うことを採り上げ得ても、相違点がある。即ち、霍公鳥の鳴く声が悲しみを誘い苦しい状態に一層させても、その声を愛でる心情が

根本にあるが、弓削皇子歌には「無かる国にも行きてしか」とあって、鳴き声を拒絶している。類歌と称される作には、その鳴き声を待ち望む気持が強いのであり、拒否する態度がない。皇子の歌には、作者の苦しみが霍公鳥を否定して表現されているところに個性が感じられる。

弓削皇子が吉野を契機として詠作した三首は、いづれも類型的でありながら、そこに個性も認められた。特に霍公鳥を素材にした二首は、宮廷の貴族が風雅なものとして歌作した内容を持ちながら、独自の世界が見られた。では、紀皇女を契機に歌われたと思われる相聞歌はどうであろうか。まず、巻八に収められた相聞歌を採り上げたい。

秋萩の上に置きたる白露の消かもしまし恋ひつつあらずは  
（二六〇八）

「秋萩の」の歌は、「……まし……ずは」という極めて形式の多い構文の倒置で、やはり類歌がある。二二五六番、二二五八番などは、その例である。また、全く同文の歌が巻十・二二五四番に収められている。さらに紀皇女を思う四首中で第二首目にある一二〇番の歌は、「……ずは……まし」という構文の類似など、類歌と見るべきである。

ところで、弓削皇子の紀皇女を思う四首は、二区分して考察

したい。即ち、類型と個性という観点から分類できることによる。一つが一一九番と一二〇番の歌、もう一つが一二一番と一二二番の歌である。

一一九番の歌は、吉野川に素材を求め、川瀬の水流が速いという景を序に用いて、第三・四句「しましくも淀むことなく」を導びいている。急流でなる吉野川を景とした序詞は、皇子の特徴に近似していても、川の流れる水のスピードを利用した表現は、万葉歌の常套句とする。又、一二〇番の歌は、前述した「秋萩の」の歌と同様に個性と呼ぶべきものがない極めて類型的な作であり、同想歌が多い。但し、磐姫皇后の第二首目にある「かくばかり」（八六）の歌と近似していることは注意される。

以上の紀皇女を思う二首は、歌の発想の方法、語句について類型的であり、且つ独自のものがない。では、一二一番と一二二番の歌も同様であろうか。まずは、前後が逆になるが一二二番の歌に触れたい。

この歌は、「大舟の泊つる泊まりの」が第三句「たゆたひに」を導く序になっている。景物を序に用いるのは、類型的な作とした一一九番の歌にも共通していた。しかし、「人の児ゆゑに」とある結句は、人妻であった紀皇女を恋する皇子の目人言を憚る負い目を感じられ、「物思ひ瘦せぬ」とある第四句を生彩あるものになっている。その一二二番にも増して皇子の独

自な内容を示すのが一二二番の歌である。

一二一番は、全体が譬喩からなる歌である。初二句の「夕さば潮満ち来なむ」とあるのは、

時つ風吹くべくなりぬ香椎潟潮干の浦に玉藻刈りてな  
(九五八)

時つ風吹かまく知らに阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りて  
な  
(二一五七)

などの類想歌と異なり、玉藻が刈れない条件を示している。

また、玉藻とは紀皇女の譬喩であり、九五八番・一一五七番などにある「玉藻」が譬喩を含まない点で異なる。一体に玉藻とは、「玉藻なす依り寝し妹を」（一一三一）、「玉藻なす靡き寝し児を」（一一三五）とあつて、寄りそう女性の美しい姿を連想させる。しかも「刈りてな」と歌うのは、初二句「夕さらば潮みち来なむ」とあり、強い願望にもかかわらず、何かの障害が起きようとして、悲恋を予感していたからであろう。夕暮に満ち来る潮、全体がひたひたと沈んでいく心の翳を深め、願望の強さはさらに空虚なものになる。夕景により、一首が叙情を深めている。まさしく弓削皇子の代表作と呼び得る歌が、一二二番ということになる。

以上は、弓削皇子歌八首について類型と個性という視点で考

察してきた。その結果は、類歌を有する歌がほとんどでありがら、個性が認められる作品も含まれていた。とくに額田王に贈った一一一番、雲に常なるものを感じて悲愁を詠んだ二四二番、そして叙景に託して孤独な心情を表現した恋歌の二二一番などは、皇子の個性が伺い得た。

但し、歌人として評価する方途のない類型的な内容の歌もあった。紀皇女への相聞歌一二〇番と一六〇八番である。特に一二〇番が類型的であるのは、他の皇女を思う三首が景によって叙情を導き出し、そこに皇子の生地が出ていただけに異質である。それは、四首で構成する意図が勝りすぎたためか、とも思われる。次には、四首の構成について考察を深めたい。

### 三、四首の構成

紀皇女を思う四首は、意識的な構成が試みられているのではないか。かかる疑問が生れるのは、磐姫皇后歌四首に近似した構成と思われ、第二首目に位置している一二〇番と八六番の歌が類似するからである。

さて、卷二の相聞歌が意図的な配列と構成とを採っていることは、ほぼ認めてよい。そして、配列と構成に注目して、歌語り・歌物語の考察が深められた。特に、天武天皇の皇子女に詠まれた相聞歌は、宮中を背景としたものがほとんどで、宮廷で享受されたことが知られる。勿論、記紀に於いても、天皇・皇

后などが宴遊を催しているし、皇子女の雅会もあった。しかも、そこではさまざまな歌、説話などが語られ、鑑賞されたであろう。万葉集では、持統天皇の御代に皇子女を中心としたロマンスの花が咲いた。

卷二の配列が編者の物語的な関心によるものとするのは、伊藤博士の歌語り論で詳細に明らかにされた。<sup>9)</sup>その卷二は、記紀の伝承で著名な磐姫皇后歌四首で始まっている。

磐姫皇后の、天皇を思ひて作りませる御歌四首

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ (八五)

右の一首の歌は、山上憶良臣の類聚歌林に載せたり。かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを (八六)

ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまで (八七)

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処辺の方にわが恋ひ止まむ (八八)

磐姫皇后歌では、第一首目に嫉妬する心理が、帰らざる夫を迎えに行くべきか、否待つべきかという決め難い女心の躊躇いで表現された。第二首は、この決め難い二つのうちで、夫を迎え

に行くことにした決意が詠まれた。ただし「高山の磐根し枕きて死なましものを」とあって、決意が何も解結しないことを踏まえている。しかも、「死なまし」とまで言っているこの厳しさは、記紀の嫉妬する磐姫のすさまじい性格と一致する。さらに、第三首が待つ決意を述べる趣へ展開する鍵は、この第二首のもつ迎えに行くことの虚しさにある。当然、第三首は第一首に示された二つの方途の残る一つが歌われることになる。しかも、「うち靡くわが黒髪に霜の置くまでに」とは、何という迫力であろうか。最後の第四首は、話が振り出しに戻って、嘆きつつ待つしかないという切ない女心が歌われている。

四首が嫉妬に揺れ動く女心を主題としている磐姫皇后の歌は、一首ずつが緊密な繋がりと展開に支えられた構成になっている。個人の創作した歌であれば、連作体と呼称されてもよい。しかも、記紀の伝承に支えられた性格までもが含まれつつ、やはり万葉集には女心の切なさという独自の世界が見出し得る。では一体、弓削皇子の歌四首は、構成がどう配慮されているのであろうか。

第一首の一一九番は、吉野川の早瀬という景に寄せて、たゆとう心がなことを皇子が願う歌である。第二首は、第一首が末永く恋いたいという願望に暮れる現実より、死を選ぼうと言う。しかし、磐姫皇后歌の第二首と同様に死があくまで事実とことなる仮定のことであり、それによって現実は変化するもの

でない。従って、第二首は第一首の末永くと願う心情を否定しても、第三首に打消した心情を展開させる要因を含んでいることになる。新しく登場する願望は、玉藻のように寄りそって美しい妹子と契りを結ぶことである。さらに、第一首から第三首までの願望は、第四首に繋がりが、結局「人の児ゆゑに」ということから、「物思ひ瘦せぬ」状態に追い込まれる。即ち、紀皇女を思う四首は、願望の尽きぬ心情のはてが第四首に収斂され、恋に苦しむ皇子を景に託して描写した。

ところで、弓削皇子の第一首は、磐姫の第一首と異なり、選択する条件が示されていない。しかし、その歌を受けた第二首は、八六番と類歌であるばかりか、まさしく同趣になっている。即ち、それは、死というものが反実仮想の意味を伴って第三首に展開させるからである。そして、第三首第四首へと展開される要因が第二首にある。この四首で一つのまとまりを示すための第二首が果たす役目に、近似した内容を持つことは、弓削皇子が磐姫歌群の構成に学んだからでなからうか。ともかく、磐姫皇后の四首と弓削皇子の四首とは、厳密な意味で絶句形式になっていないが、絶句の四行詩に学ぶ構成である。

以上、弓削皇子が紀皇女を思う四首の構成について、磐姫皇后歌に近似した内容があることを述べた。その類似の鍵を示すのは、第二首目にあたる歌であった。

ところで、歌が連鎖されているだけでは、連作にならない。



連作であるためには、四首に共通するものがなければならぬ。磐姫皇后歌には、構成の綾もあり、一貫した主題と心情の展開に筋が認められる。即ち、歌物語的と呼び得る内容が含まれている。一方、弓削皇子の四首について、次節では、今歌物語的と述べたことに触れてみたい。

#### 四、歌語りと歌物語

磐姫皇后歌の四首については、歌物語的と説明した。或は、歌語りと呼称するのが適当かも知れない。それは、歌物語と歌語りとがそれぞれ厳密に規定できないし、規定しにくい曖昧な要素を含むからである。

そもそも語りということは、人に聞かせるときの語法である。しかも聞く価値があるのは、誰が、何を、何時、どこで、何為したということでなからうか。それを話とすれば、話を語るのが物語の根本であった筈である。

ところで、歌物語という特定の文学形態を表わす言葉がある。伊勢物語・大和物語を指すが、その言葉の用例は栄華物語以後になる。

一方、歌語りなる言葉がある。源氏物語・紫式部集などの用例を参考にして定義された。勿論、歌物語と同様に上代文献に見出し得ないが、万葉集の研究では常識として使用されている。そこで片桐洋一氏、伊藤博博士などの論を参照して定義す

れば、歌語りとは、歌についてその由来を説明する語りで、その歌を吟じて紹介することを言う、とまとめられよう。

今述べて来たことを踏まえて、紀皇女を思う四首が歌語りとして把握すべきか、或は歌物語として理解すべきか、さらに追求してみる。

ある個人が四首で一つのまとまりを示す作品をものしているのは、人麿が安騎野で詠んだ長歌四五番に添えた短歌四首（四六～四九）がある。まず、それら四首を引用する。

#### 短歌

阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに

（四六）

ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し

（四七）

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

（四八）

日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は来向かふ

（四九）

人麿の四首は、一夜という時間の推移に従って構成されている。第一首が古の思い出を、第二首が草壁の形見として狩にやっ来て来たことを、第三首が寝られないで夜明けをむかえた景を、

第四首が今は亡き草壁が狩に出発した時刻になったことを、それぞれは歌う。そして、そこには絶句形式の起・承・転・結という構成になっている。但し、第一首と第二首、第三首と第四首とがそれぞれ一対をなしている。即ち、四六・四七番歌は、

長歌四五番の叙述を言いかえた内容と阿騎野が草壁皇子の形見の地であり、故地であることを慕って狩が行なわれようとしたことを明らかにした。四八・四九番は、四八番が絶句の転部として、前二首が叙情を主とした歌であったものを叙景に転換させ、さらに四九番が「過ぎにし君」(四七)という漠然とした人物であったものを、「日並皇子」即ち草壁皇子であったと明らかにして、歌いおさめる役目をそれぞれ負っている。さらに、「今」と「古」、「夜」と「朝」といった重層は、緊密な構成を採る短歌四首にしている。この四首連作という長歌に添えられた短歌(反歌ではない)による新しい試みは、人麿の創意であり、持統朝に生まれていた。

その他四首でまとまりを示す歌群は、田部忌寸櫛子が大宰に行ったときの四首(四九二〜四九五)、河辺宮人が姫島の松原の美人の屍を見て詠んだ四首(四三四〜四三七)などもある。但し、四首が起承転結の絶句形式を踏まえて連作されている歌は磐姫皇后歌、弓削皇子歌、今の人麿歌、そして巻十二の人麿歌集歌(三二二七〜三二三〇)、さらに坂上郎女が藤原麻呂に七夕を主題に答歌した四首(五二五〜五二八)だけである。

さて、ある個人が絶句形式に学び連作した四首の歌群は、歌

語り、歌物語と呼ばれているであろうか。磐姫皇后の歌群が歌語り、歌物語と呼ばれることは、それなりの理由がある。しかし、人麿、坂上郎女などの連作四首は、かかる呼称で説明されることがない。

ところで、弓削皇子と紀皇女との略伝を既に述べたが、紀皇女は男女の世界で評判になる要素をもっている。巻三の石田王と紀皇女について触れた左注、巻十二の高安王と紀皇女の伝承を伝えた左注などは、紀皇女のそれを語る。しかも、皇子女の浮名が立ちやすい持統期であれば、ロマンスが口誦されたと考えられそうである。かかる伝承の世界に支えられ、紀皇女を思う四首が磐姫皇后歌四首の如く生成されても当然かも知れない。ちなみに、伊藤博士は、素材・構成・題詞などあらゆる点で磐姫皇后四首と酷似していて、「磐姫歌語りに興味を抱いた誰かが、それに因んで、諸方の歌を集めて集成した面」の強いことを指摘されている。<sup>ii)</sup>

しかし、紀皇女を思う四首が弓削皇子の作であることは否定できない。確かに磐姫歌八六番と皇子歌一二〇番とが類歌で、構成も似ているからと言って、歌そのものの中には、皇子の個性が認められた。中西進博士は、弓削皇子を「視覚の詩人」と評価した。<sup>iii)</sup> その視覚の詩人たらしめる「夕さらば」(二二二)の歌など紀皇女を思う四首は、まさしく景に心情を託して歌う皇子の生地<sup>iv)</sup>に満ちている。仮託されたとすることは、不可能で

ないだろうか。やはり、人麿の阿騎野の四首と同様に、皇子が磐姫皇后歌に学び、その構成に学んで四首をものした個人の連作であった、と考えたい。

そこで、歌語りか、歌物語かということになる。神野志隆光氏は、事件や人物への興味が基盤となった歌群に、ロマンスを構想する営みが歌語りにならない、むしろ物語的な構成を見ることである、と論じられた。<sup>13</sup> 即ち、歌語りと物語的な構成とは明瞭に区別しなければならぬ。

人麿の阿騎野四首は、虚構的な構成、叙事的な志向、物語的な内容を認めても、前述した歌語りの定義と比較して、歌語りと呼び得ない。同様に、弓削皇子が紀皇女を思う四首は、歌語りと呼ぶべき内容がない。即ち、磐姫皇后歌に近似した構成であつても、やはり皇子の個人的な連作という試みが心情の展開に筋を持たせたのであり、弓削皇子歌四首は、その構成が物語的であつたに過ぎない。

以上、弓削皇子歌の四首は、歌語りと呼ぶべきでないことを述べた。しかし、連作による構成は、心情の持続的な、叙事を志向した内容を含むものである。今、叙事を述べたことは、短歌を連作して、場面の転換や発展をはかり、全体を結ぼうとする構成をいう。しかも、人麿が阿騎野の四首で試みた連作による叙事を、弓削皇子は紀皇女を思う四首の相聞歌で実現させた。即ち、紀皇女を思う四首とは、磐姫皇后歌に学ぶ弓削皇子の

四行詩ともいうべき新しい詩形であつた。

## 結 び

弓削皇子の詳細な作品分析から、類歌を持つ歌にも個性的な内容が含まれることを最初に論証されたのは、高野正美氏である。<sup>14</sup> 又、弓削皇子と額田王との贈答歌に注目され、皇子の人生を深く考察されたのが、吉井巖氏であつた。<sup>15</sup> そして、それらの研究やこの拙論でも明らかになつたことは、伝統に基づきながら、皇子の生が伺い得る作品をものしてしたことである。とくに、伝統を踏まえつつ、叙景歌に接近した、

夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅鹿の浦に玉藻刈りてな

(一一二)

などは、景に叙情を託する発想を見せ、まさしく中西進博士のいう「視覚の詩人」たる代表作である。<sup>16</sup>

さらに、叙景歌への接近という新しい歌の発想を試みた皇子は、連作による叙事的な内容を持つ詩形を実現させていた。即ち、四行詩ともいふべき連作体がそれである。

思うに、叙景歌への接近と四首による新しい詩形を実現させていたことは、皇子を一回的な、素人的な歌人と呼び得ない要因になる。即ち、短命で哀愁をおびていた皇子の人生を歌に

託して表現した意欲は、叙景的な内容と連作体の試みとに表われたのであり、その行為を積極的に評価しなければならぬ。但し、作歌する契機があまりに限定されていたため、秀歌と呼ぶべきものが少いことを遺憾としなければならない。

〔注〕

- (1) 「額田ノ姫王效」『万葉集大成』第九卷所収 一三三頁
- (2) 「弓削皇子の歌」『万葉集を学ぶ』第二集所収
- (3) 「譬喩歌」の構造」『古代和歌史研究1』所収 一九〇頁
- (4) 拙論「但馬皇女歌の特質」(広島女学院大学「国語国文学誌」第九号)で触れている。
- (5) 注2に同じ。
- (6) 「弓削皇子」(帝塚山学院大学研究論集)第三集
- (7) 「額田王論」(『万葉集の比較文学的研究』所収) 一四五頁
- (8) 『万葉集(一)』(講談社文庫) 二四四番の脚注
- (9) 「恋物語の傾向」(『万葉集相聞の世界』所収)「万葉の歌語り」(『古代和歌史研究5』所収)など。
- (10) 片桐氏「歌物語の淵源と歌語り」(『伊勢物語の研究(研究篇)』所収)
- (11) 伊藤博士「歌語りの世界」(『古代和歌史研究5』所収)注3に同じ。一九二頁
- (12) 『万葉集』(鑑賞日本古典文学) 八八頁
- (13) 「伊藤博士の八歌語り」論をめぐって」(『日本文学』第二六卷五号)
- (14) 「弓削皇子」(『古典研究論考』創刊号)
- (15) 注6に同じ。
- (16) 注12に同じ。